

2020年4月19日（日）「人を二分する復活の事実」

マタイ 28:11-15

11 女たちが行き着かないうちに、もう、数人の番兵が都に来て、起こった事を全部、祭司長たちに報告した。12 そこで、祭司長たちは民の長老たちとともに集まって協議し、兵士たちに多額の金を与えて、13 こう言った。『夜、私たちが眠っている間に、弟子たちがやって来て、イエスを盗んで行った』と言うのだ。14 もし、このことが総督の耳に入っても、私たちがうまく説得して、あなたがたには心配をかけないようにするから。」15 そこで、彼らは金をもらって、指図されたとおりにした。それで、この話が広くユダヤ人の間に広まって今日に及んでいる。

【序論】

マタイ福音書からの説教も残すところ2回となりました。28:11以下を1回にまとめるべきか2回に分けるべきか悩みましたが、最終的な判断として分けることにしました。個人的な「好み」を申し上げるようで恐縮ではありますが、私は最近まで11-15節の記事がどうしても好きになれずにきたのです。この箇所は読んでのとおり、墓の番人とユダヤの権威筋との間で捏造された「イエスの復活は弟子たちによるでっち上げである」という物語が、第一世紀のユダヤ人の間で広く流布されたという内容です。何と申しますか、このような話を敢えて加えるところに著者の作為的な意図を感じてきたのです。護教論¹的なイメージが残り、主イエスの復活をそうまでして擁護しなくてはキリスト教の真理を守ることができないのか？と。それなら、むしろ書かない方がよかったのではないか。そのまま16節以下の大宣教命令に進んで、揺るぎない結論でもって締めくくれば、それでよかったのではないか。そのように長年考えてきました。

そんなネガティブな感情を持って取り組み始めた箇所ではありましたが、丁寧に調べていくうちに、この捏造物語が示す矛盾の数々が見えてきて、かえって主イエスの復活の事実を強化する役割を果たしていることに気づかされたのです。祭司長たちが大切にしているものが何であるか、彼らが行なったことが本質的に何を意味するのかも分かるようになりました。また、この捏造物語は思いのほか長く歴史に居座り、紀元2世紀半ばまでユダヤ人の間で信じられていたということも分かっています。それほど当時のキリスト者にとっては深刻なデマだったのであり、弁証の必要に駆られていたのでしょう。

¹ 異教や異端に対してキリスト教の真理を弁護、弁証すること。

【本論】

本論 1. ユダヤの権威筋の狼狽

女たちが行き着かないうちに、もう、数人の番兵が都に来て、起こった事を全部、祭司長たちに報告した。(28:11)

原文には「もう」という単語は入っておりませんので、単純に「数人の番兵が来た」と訳せばよいでしょう。この人々は墓の番をしていた番兵の中の一部の者であったと思われます。あくまで想像ですが、4人いたうちの2人とか。全員で来なかったところを見ると、この番兵たちの間でも意見の不一致があったことが窺えます。墓の番をしているところに御使いが現れたという事実を、誰にどう伝えるべきかで分裂した。そもそもこの番兵はピラトから派遣された人々だったと思われるので、おそらく（ユダヤ人ではなく）ローマの兵士だったのでしょう。本来ならば、ピラトの所へ直接報告に行くのが筋なはずですが、彼らはユダヤ人の祭司長の所へ報告に行っているのです。それは、ピラトが祭司長たちの下に番兵を配属していたからでしょう。兵士たちの立場からすると、ピラトに報告に行くのは危険なことでした。なぜなら、墓の番という任務を全うすることができなかったからです。番兵が立てられていたにも拘らず、イエスの遺体がなくなったとあっては、任務を果たさなかった罪に問われることになるでしょう。ローマの兵士は、宗教的な立場からも、御使いの存在など信じていなかったかもしれませんし、実際に現れた御使いについてピラトにどう説明したらよいかすら分からなかったのです。

私たちに置き換えてみてもそうでしょう。誰かの家の留守番を頼まれ、その家の家宝を守るように頼まれていたとします。しかし、天使が現れたので逃げ出し、その間に家宝がなくなってしまったとしたら、家の主人にどのように報告するのでしょうか。「そんなバカな話があるか」「もっと上手な嘘をついたらどうだ」と一蹴されるに違いありません。

番兵たちは話し合い、とりあえず「御使い」のことを分かってくれそうなユダヤの権威筋に報告することにしたのです。しかし、それについても番兵の間では意見が割れ、ピラトに報告に行くのが筋ではないかと言う者もいたので、「一部の者」だけとなったのでしょう。

そこで、祭司長たちは民の長老たちとともに集まって協議し、兵士たちに多額の金を与えて、こう言った。(28:12-13a)

報告を受けた祭司長たちは、大変困る状況になったことを知りました。そもそも、イエスの弟子たちが夜中にやって来て、墓を開け、イエスの遺体を盗み出し、イエスが復活

したとふれ回ることを防ぐために番兵を立てていたのです。ところが、その予防策が打ち破られ、本当にイエスが復活したことが報告された。これは番兵がしっかり見張っている中で起きた事件であり、番兵がイエスの復活の証人となってしまったのです。彼らの思惑とは真逆のことが起きている。彼らは一面、誰よりも早くイエスの復活の噂を聞いたのです。もしこれが事実であるならば、イエスを十字架につけた彼らの責任が問われることになるでしょう。イエスは紛れもなく神の子であったのですから、彼らは今ある立場を追われるか、民衆に石で打ち殺されるか、自分たちの身を案じたのです。そして、長老を呼んで協議しました。ここに集まったメンバーはサンヘドリンの構成員の一部だったと思われますが、もちろん非公式な会合です。次に、彼らが作り出した嘘の物語の中身を見てまいりましょう。

本論 2. 捏造された物語の矛盾

「『夜、私たちが眠っている間に、弟子たちがやって来て、イエスを盗んで行った』と言うのだ。もし、このことが総督の耳に入っても、私たちがうまく説得して、あなたがたには心配をかけないようにするから。」(28:13-14)

ユダヤの権威筋は番兵たちに嘘をふれ回るよう指示しました。彼らが夜番をしている間に眠り込んでしまったという「怠慢」を理由にさせる。この理由は大きな問題を孕んでいます。仮に番兵が任務中に眠りこけていたとなりますと、それは義務の怠慢であり、処刑される可能性があるからです。番兵たちは実際には眠っていたのではなかったでしょう。そのような嘘をつくことは大きなリスクを伴います。

また、もし彼らが本当に眠っていたとしても、巨大な石を誰かが「ウンショ、コラシヨ」と動かしているのに気づかないことがありますでしょうか。石と墓の入口との隙間を埋めるために、土かモルタルが塗り固められていたと思われますので、それを崩す作業も必要となります。

更に、もし彼らが眠っていたのであれば、墓泥棒が一体誰であったのか（本当にイエスの弟子たちだったのかどうか）、分かるはずもないのです。

このように、様々な矛盾を含む捏造物語をユダヤの権威筋は苦し紛れに考えたのですが、その嘘を広めることは自分たちの命（または今後の人生）に関わる問題となることを番兵たちが分からないはずありません。任務中に居眠りをしていたという嘘を自らつかなくてはならない。これは不名誉なことであって、身内からも排斥される状況となるかもしれません。そして、これは何よりも彼らの良心の問題と関わることです。人間は事実を事実として伝えることには命を懸けられるかもしれませんが、嘘のために危険

を冒し、しかもその嘘を墓まで持って行かなくてはならないとすれば、一生の悔いが残ることになるでしょう。

おいそれとは“Yes”と言わない番兵たちを説得するため、祭司長たちは多額の金を用意しました。彼らが納得し、一生嘘を貫き通すに値する金額でなくてはなりません。それは、イスカリオテのユダに支払われたように、ユダヤの公金から出されたものです。神の民の献げ物が賄賂のために用いられる。それを与える側も、受け取る側も、神の御前に罪が問われることになるでしょう。

番兵たちが恐れていたことがもう一つあります。それは、ピラトに自分たちの失態が伝わる日が来るかもしれないということです。その日には、自分たちの首が飛ぶかもしれない。その不安を伝えたところ、祭司長たちは「その心配はない」と言って安心させました。彼らの考えでは、ピラトは過越の祭が終わればすぐにエルサレムを離れカイザリヤに戻るだろうし、そもそもピラトはイエスの復活云々には興味がないはずだ。仮に番兵が罪に問われることになれば、我々がピラトにも多額の金を払って満足させよう。そのような約束を交わしたと思われまます。すべてが金で解決されようとしている。この世の罪の原理そのものと言えるのではないのでしょうか。

本論3. では、どうすればよかったのか

そこで、彼らは金をもらって、指図されたとおりにした。それで、この話が広くユダヤ人の間に広まって今日に及んでいる。(28:15)

最終的に、番兵たちは説得に折れ、多額の金を受け取って、この交渉を成立させてしまいました。まさに人間世界の罪の現実を描いています。如何に多くの真実が金によって歪められてきたのでしょうか。今日、最後に考えたいことは、番兵とユダヤの権威筋が、この状況にあって本来どのように行動すべきであったかということです。

少なくとも、番兵たちは御使いを目の当たりにし、超自然的な出来事を経験しました。彼らが復活の主を見たかどうかは分かりません。しかし、イエスの復活は確かに彼らに知らされたのです。それならば、彼らはイエスを「神の子」と信じることはできたはずです。これは幽霊を見るのとはまったく意味合いが異なります。聖なる栄光の姿で甦った主イエスには、神の権威が具わっており、御使いの顕現そのものが神の栄光を反映していたのです。番兵たちにとって、神の栄光にふれる機会が与えられたということは、実はこの上ない特権でありました。使徒になれる可能性すらあった²。その光栄を握りしめ、主イエスを信じて生きる道を選択することもできたはずなのです。しかし、彼ら

² 使徒の条件とは、①復活の主と出会った人 ②主イエスから直接任命された人

は金に目が眩み、骨抜きにされ、残る人生を嘘で塗り固める道を選んでしまいました。

では、祭司長たちはどうでしょう。彼らもまた、イエスの復活の事実を伝えられたとき、「そんなバカなことがあるものか」と否定することはなかったのですから、あとはイエスを信じるか否かという問いの前に立たされていたのです。シンプルに、自分たちが殺害したイエスはまことに神の子であったと認め、神の前に膝をついて悔い改めればよかったです。しかし、彼らはその事実さえも揉み消す道へと進んで行ってしまいました。それも、賄賂を与えることによって、罪に罪を重ねたのです。

これらのことから、読者は何をメッセージとして受け取ることができるか。事実を事実として認めること、罪を罪として認めることが如何に重要であるかということ。そして、それが如何に難しいことであるかということも同時に示されます。私たち人間は、どうしても臭い物に蓋をしたがる傾向があります。自分の失敗を人に知られたくない、間違いを認めたくない、そういう性質を持っていることにおいて、ユダヤの権威筋と同質の人間と言えないでしょうか。事実が目の前に突きつけられたとき、それは人間の向かう方向を二分することになる。真実に向かって方向転換するか、はたまたそれまでの自分を正当化するために真実を揉み消すか（これが「聖霊を汚す罪」と言われるものです）。真実を取るとき、別の意味におけるリスクが伴うようになるかもしれません。過去の自分の失敗（恥）を白日の下に晒すことになるでしょう。また、真実を揉み消そうとする者たちの迫害に遭うかもしれません。しかし、真実のためには人は命を捨てるのが可能であり、それだけの価値があるのです。主の弟子たちはその道を選んで行きました。主の復活を命懸けで宣べ伝えていった。

【結論】

私は当初、今日の箇所を「無意味で福音書の価値を下げる記録」としか見ていませんでしたが、学ぶことによって見方が変わりました。主イエスの復活の事実が、この捏造物語によって反対方向から強化されていることを知ったのです。そして、ここには自分の生き方に関わる重要な真理が描かれていることにも気づかされました。自分自身が「偽り」に立って生きてはいないか。今日の箇所に登場するユダヤの権威筋も番兵たちも、まだチャンスがないわけではありません。（生きている限り）彼らには偽りを捨てて真実を（信仰を）告白するチャンスが残されていたのです。福音は私たちを正しい生き方へと立ち返るチャンスを人生の終わりまで与え続けるものです。

【祈り】

光であられる神よ。あなたは私たちに光の内を歩むことを求めておられます。救われたその日から、それまで自分を苦しめてきた多くの心の闇が光へと変えられてきました。しかし、まだ自分の内に隠された闇が残されているのでしたら、それに気づかせてください。そして、あなたの御前に罪を告白し、すべてを光としていただくことができますように。そこにまことの喜びと平安があることを私たちは知っています。私たちが光の子として歩ませてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
闇に光を、混沌に秩序をもたらし給う、父なる神の愛、
罪ある者を、復活の真実の許へ招き給う、主イエス・キリストの恵み、
生ける限り、人生に輝きを増し加え給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。